

# 「西条祭り」における伝統文化の現状と継承

1190530 久岡 日菜子

高知工科大学 経済・マネジメント学群

## 1. はじめに

近年日本の各地において、人口減少や高齢化により、祭礼や神楽などの伝統文化の存続危機が、問題視されている。その中で、愛媛県西条市の伝統文化である「西条祭り」は、伊曾乃神社の例祭として江戸時代より代々受け継がれ、現在に至っている。この祭礼では、神社に屋台（だんじり）を奉納する神事が行われるが、このだんじり製作を、家族で代々受け継ぎ、古きよき時代の形を残しながら、その技能を後世に残そうと奮闘している。そこで、本研究では、西条だんじり製作者にヒアリング調査を行い、次世代への西条祭りの継承方法を明らかにする。

そして、全国で危機に瀕している伝統工芸を次世代に受け継ぐ伝承方法を見出すことを目的として実施した。

## 2. 背景

日本の各地において神社で行われる最も重要で盛大なお祭りとして、「例祭」が全国各地で開催されている。例祭は、伝統文化として年に一回行われる祭典で、例大祭とも呼ばれており、神様の御神徳を称え、皇室のご安泰、氏子・崇敬者の繁栄、五穀豊穡などが祈られる。しかし、伝統文化の中には、現代の少子高齢化や時代による環境や生活の変化によって、存続の危機に瀕しているものもある。例えば、神楽を見ると、少子高齢化の急激な進行により後継者が確保できず、休止に追い込まれた事例（「三峯神代神楽」埼玉県秩父市、2015年4月5日）や地域外や女性に門戸を広げた事例（「早池峰岳神楽」岩手県花巻市）のように、後継者問題が深刻化しており、早急な対策が求められている。

その中で、愛媛県西条市中野に位置する伊曾乃神社で毎年行われている例大祭は、「西条祭り」と呼ばれる。五穀豊穡を祈り、西条市の発展を祈った例祭で、江戸時代中期から続いており、約300年の歴史がある。1761年（宝暦11年）には文献上初めて伊曾乃祭にだんじりが登場しており、神楽所を巡

幸する御神輿（ごしんよ）にお供して町を練り歩いている。

このだんじりには多くの彫刻が施されており、西条祭りの歴史を踏まえつつ、奉納する氏子地区の町内側の思いと制作者の個性が融合した西条市の伝統工芸となっている。

そこには、古きよき時代の形を残しながら、西条祭りを後世に残そうと、地元西条市において、家族で代々だんじり制作を受け継ごうとしている地域住民の熱き思いが詰まっている。その思いが、西条祭りが存続している大きな要因となっていると考えられる。

よって、次世代への西条祭りの継承方法を明らかにすることで、今後も次世代に西条祭りが受け継がれていくための参考事例になり得ると考えられる。



(図1 愛媛県西条市の位置)

## 3. 目的

本研究の目的は、西条祭りを対象とし、過去から現在にかけてどのように継承されているのかを、だんじり制作者の方へのヒアリング調査により明らかにし、その上で、次世代への西条祭りの継承の在り方を明らかにする。

## 4. 研究方法

本研究は以下の手順で行う。

- ① 愛媛県西条市の「西条祭り」を対象とし、だんじり大

工、彫刻師の方に対して、ヒアリング調査を実施する。その上で、これまでの技能習得の過程等について把握し、技術継承の現状と今後の課題等を把握する。

- ② ヒアリング結果をまとめ、分析し、技能的進化と心情的進化の二つの視点から、だんじりの技能継承のあり方について明らかにする。

## 5. 既往研究の展開

山本(2008)では、トヨタ自動車の生産方式を事例として挙げ、伝承の成功要因は、時代や国の風土の変化に配慮しつつ、技術・技能だけでなく、言葉や数値で言い表せないような作業能力、知識である「暗黙知」、「コンセプト」が伝承されていることであると述べている。

また、成田・下出・来田(2016)では、技能継承問題が解決しない要因として、そもそもの問題の所在が顕在化されていないことに起因するとし、伝統工芸の近年の動向と既存の取り組みについて調査が行われた。職人は長期に渡る修行によって実践的に技能を習得し、長年の経験から得る感性やノウハウに基づき作業を行っている。そうして身に付いた身体的技能は、言葉にすることが難しいため、実践による技能の継承が不可欠であると述べている。

上記の既往研究から、技能、技術自体に着眼し、伝承のメカニズムを明らかにしている研究が多いことが分かり、伝統工芸に携わる職人、職人の生い立ちから紐解く研究事例は見つからなかった。

これらの既往研究結果も踏まえ、西条だんじりにおける伝統継承の在り方や継承過程における変化について紐解いていく。

## 6. 概要

### 6-1 西条祭りの概要

五穀豊穡と市の発展を祈る祭礼とされており、だんじり、みこし、太鼓台が神社に奉納される。嘉母神社祭礼、石岡神社祭礼、伊曾乃神社祭礼、飯積神社祭礼を総称して「西条祭り」とされている。本研究では、最も規模の大きい伊曾乃神社の例大祭を中心に課題を明らかにしていく。伊曾乃の大神様をお遷し申し上げた御神輿(ごしんよ)が、氏子地区に渡御し神楽所を巡幸する。伊曾乃神社祭礼に奉納するだんじり 77

台、みこし 4 台は、神輿をお供するような形で、ひとつの神社に奉納される御輿の数としては全国にも例のない大きな祭りである。江戸時代中期から続いており、約 300 年の歴史がある。開催日は、主として 10 月 15 日、16 日の二日間にかけて開催される(表 1)。平成 5 年には、西条市教育委員会から、だんじりとみこしの「統一運行」という祭礼形式が、無形民俗文化財にも指定されている。「統一運行」とは、祭礼の取締にあたる「鬼頭会」により平成 12 年に定められた「定め書」のもと、古くから決まった経路を運行することである。

表 1 伊曾乃神社例大祭の流れ

10月14日	前夜祭	17時～21時頃	市内各所を練り歩く。
10月15日	宮出し	2時～6時頃	伊曾乃神社境内へ御神輿をお迎えし奉納。
10月15日	自由行動	日中	市内各所を練り歩き、御花を集めて回る。
10月16日	御旅所	1時～5時頃	神様をお迎えし、これより統一運行が始まる。
10月16日	御殿前	～10時頃	旧西条藩の陣屋跡で順番に奉納。
10月16日	玉津地区	～12時頃	市内の各氏子地域を巡行。
10月16日	宮入り(川入り)	～18時頃	加茂川に神戸地区11台のだんじりと御神輿が入る。その他65台のだんじりは土手に整列し、見守る。
10月16日	後夜祭	～21時頃	祭りの余韻を味わうかのように市内各所を練り歩く。



(図 2 御殿前にて奉納中のだんじり)

### 6-2 西条祭り(伊曾乃神社祭礼)の歴史

江戸時代中期(1761年)に、文献上初めて伊曾乃祭に「屋體(屋体)」として、現在の「御供だんじり本町」と思われるものが登場している。徐々にだんじりやみこしの数が増加し、1842年(天明13年)頃には23台ほどであった。当時伊曾乃神社例大祭は9月15日とされていた。その後、1941年(昭

和 16 年) には旧西条市が誕生し、祭礼日も現在の 10 月 15・16 日に決定された。1945 年 (昭和 20 年) 8 月 15 日、太平洋戦争終戦により神道行事は禁止とされたため、西条市内の各神社は祭礼を中止となった。翌年祭礼は復活したが、戦後、青年たちが減少し、運行を断念する町内もあった。また昭和 20 年代頃にかけて、例年のようにだんじり同士の喧嘩が起こり、大破し再起不能となるようなだんじりもあったという殺伐とした時代であった (図 3)。喧嘩や事故が多発する中、1953 年 (昭和 28 年)「西条祭振興会」、1960 年 (昭和 35 年)「平和祭典運営協議会」が発足され、現在の平和で安全な祭りの運営に関わっている。現在は、伝統を受け継いだ市民を中心に、平和運行での祭礼となり、子供からお年寄りまで楽しむ地域の恒例行事となっている。祭りに参加するため、祭礼期間中は地元企業や学校が一斉に休みになったり、遠方に暮らす西条出身者も仕事を休んで帰省するなど、西条っ子の祭りにかける意気込みや祭りに対する愛着が強い。

服装にも変化があり、昭和 20～30 年代にかけては、三つ揃えと称される毛糸の股引、腹巻、襦袢が主流であり、ネル生地肌の肌衣、白い腰巻、黒の兵児帯、地下足袋、ソフト帽子を着用していた。昭和晩期以降は、町内ごとのユニフォームとして「法被」、ダボシャツ、腰巻、地下足袋を着用するのが主流となった。



(図 3 昭和 20 年代の喧嘩の様子)

### 6-3 屋台 (だんじり) の概要

西条祭りにおいて、醍醐味でもある「だんじり」は、御神輿にお供する形で、神社に奉納される。重量 500～800kg、高さ約 5m でヒノキを使用した屋台型の造りである。二階または三

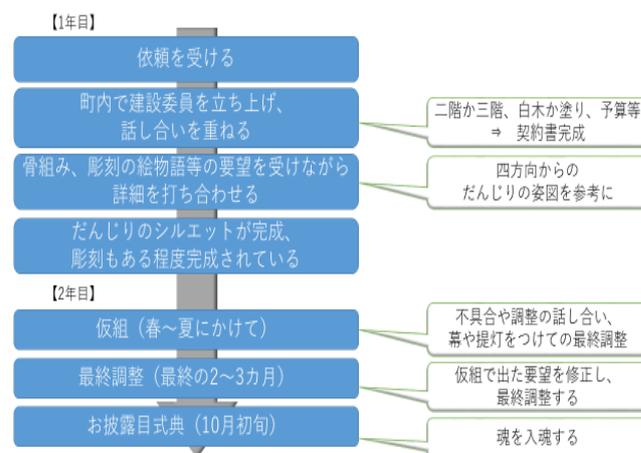
階の造りで、白木、黒塗、真っ赤な朱塗りの 3 タイプに分けられる。表面には、だんじりの主題が描かれており、神話、春秋・戦国時代の中国の話、武者絵、花鳥もの等の時代絵巻が、透かし彫りと呼ばれる欄間彫刻によって施されている。平成 14 年 2 月 15 日には、この彫刻技能が「えひめの伝統的特産品」に指定されている。組み立てには、くぎなどの金物は一切使用せず、木をつなぎ合わせる込み栓や楔 (くさび) を用いて締め固める。

祭礼期間中は、だんじりを約 12 人～20 人ほどで担ぐ、またはタイヤ付きの台車に乗せて引っ張りながら運行する。神楽所の前など、要所ではだんじりの最下層を持ち、腕の力だけで頭の上に高く持ち上げる「差し上げ」を行い、見せ場を迎える。太鼓、鉦(かね)を鳴らし、掛け声や伊勢音頭などの祭り唄を響かせながら町を練り歩く。祭礼が終わると、解体し、各町内や保存会で専用の収納箱にて保管される。



(図 4 上段部 破風の彫刻)

### 6-3 だんじり製作から完成までの流れ



(図 5 だんじり製作の手順)

だんじりは、基本的に依頼を受けてから「二年計画」で製

作を進めていく。最初の一年では、依頼を受けた町内の代表の方との話し合いを重ね、シルエットや彫刻の主題等を決定し、予算との兼ね合いを考えながら契約書を作成する。現在は、これまで作っただんじりのスタイルを引き合いに出し、希望が聞けるようになったため、昔に比べるとスムーズに取り掛かりやすくなったとのことだ。その後、製作に取り掛かり、二年目の春から夏にかけての間に、「仮組」を行い、町内の方と不具合や微調整の確認、幕や提灯をつけての最終調整を行う。仮組で挙がった要望を修正しながら最終の仕上げに取り掛かり、祭礼前の10月初旬には「お披露目」の式典が執り行われる（図5）。

## 7. ヒアリング調査概要

本研究は、ヒアリング調査を用いて調査を行う。調査方法は、以下のとおりである。

### ◎ 目的

だんじり製作における、これまでの技能習得の過程等について把握し、技能継承の現状と今後の課題を抽出する。

### ◎ 日時

- ・平成30年11月21日
- ・平成30年12月24日

### ◎ 対象

- ・西条だんじり大工、彫刻師  
石水公文さん、石水綱一さん（親子）

### ◎ 内容

- ・携わるようになったきっかけ
- ・やりがいや生きがい等の心情
- ・自身の技能革新となったタイミング
- ・今後の伝統継承について

## 8. 西条だんじり製作 石水家の概要

### 8-1 石水家の歴史

初代は、元禄期から続く西条の宮大工（御殿大工）の山本家の棟梁として「魚屋町萬吉（山本萬吉）」と称し、屋号を継ぐ。次第にだんじりの建造も手掛けるようになる。その後、二代目、三代目から現代の石水親子まで、大工・彫刻師

の家は西条の地に生き続け、だんじりの修理や建造を手掛けている。1853年（嘉永6年）に、初代魚屋町萬吉氏により「上横町屋台」を建造しており、石水家として現在約166年以上の歴史がある。

約166年以上受け継がれている。

最初はだんじり一台作れたらと、既存のだんじりの修理が中心であった。しかし、昭和50年代にかけて、周りの町内が新調をしいたことと、町内の活性化のためにも、「新調ブーム」が起こる。以来、だんじり一台を新たに製作する仕事が増えた。

### 8-2 六代目 石水綱一さん

表2 人生年表

和暦	年齢	事項
昭和56年	0歳	西条市にて生まれる。
平成8年頃	15歳頃	父や祖父の仕事を手伝っていた。
平成16年	23歳	彫刻師の仕事に就き、だんじり製作に携わる。
平成22年	29歳	「北川だんじり」新調で彫刻を手掛ける。
平成30年（現在）	37歳	叔父と一緒に仕事をしながら腕を磨いている。

23歳（平成16年）の時に彫刻師の仕事に就き、1年目から手伝いや、だんじりの製作に携わっている。その後、「荒彫り」という形を整えるだけの仕事から始まり、龍のうろこを突いていく仕事など、とにかく経験値を増やししながら、その都度、指導や指摘をしてもらうという繰り返しであった。師匠の元を離れた後も、師匠から任された仕事を中心に、彫刻の仕事を行う。また、自身に依頼を受けた仕事も増え、その腕を磨いている。段々と教わる内容が変化しているという訳ではなく、任された仕事をとにかくやってみて完成形近くまで仕上げから指導が入るという形で、経験を積んでいる。半年ほど前から、大きな仕事を任されることもあり、また一から勉強がてらと、師匠である叔父と一緒に仕事をさせてもらっている。一人である時と比較すると、腕はさらに上がっていると実感しているとのことである。こうした経験は、伝統工芸一般にみられる伝承形態（固定的な部分）である。石水家の場合、だんじりの製作技能は叔父から後継者に伝承されている。

## 9. 技能進化イベントとその効果

現在、石水綱一さんは、叔父の依頼を受けて共同してだんじり制作にあたっているほか、自身で依頼を受け独自にだんじりの一部を修理する作業にあたっている。しかし、このレベルに至る過程において、技能は一様に習得してきたわけではなく、人生のイベントを通して、技能の発展や改善が見られたことが分かった。

イベントとその効果を以下に記す。

### ■ 「祖母が亡くなった時」中学生の頃

「南町だんじり」の三階への改修(平成8年)の製作の際、祖母が亡くなった。当時、棟梁であった祖父や家族も急な不幸事に追われ、仕上りの期限がぎりぎりとなっていた時に、自分たちも手伝うことになった。期限に間に合わないことは、町内の楽しみにしている方の信頼を失うこととなるため、家族で力を合わせて奮闘した。塗りの部分を手伝うなど手分けして作業を進めた。お披露目に間に合うように、また依頼者が満足してもらえるものとして完成させることができた。

→ 「期限」と「納得のいく仕上がり」を大切に、家族で一致団結し受け継いでいく責任を強く自覚したのではないかと考えられる。

⇒ 技能の継承の度合いが高まる。

### ■ 「北川だんじり新調」2010年(平成22年)29歳の頃



(図6 北川だんじりお披露目式)

三階・白木・彫り:三国志

初めて新調だんじりの彫刻を任せてもらい、彫刻師としての処女作となった。大工である父(公文さん)や師匠である

彫刻師の叔父との連携もあったため、作業が取り掛かりやすかった。しかし、今まで下積み時代を経験しているという自負はあったが、いざ一人でやってみるといのはなかなか大変で苦労を重ねた。最初の作品ということもあり思い入れが強く、運行しているだんじりを見ると、町内の方からも大事にしてもらえているという嬉しさとともに、苦労話も思い出される。後々見返せば、当時より技能面で向上しているため、今ならさらに駆使できる所があると感じている。また、スピード面でも向上していると感じている。この一台で満足することはなく、自分自身の全てだと評価されるのではなく、次回作の依頼を受けた時に、進化したことを見せつけていきたい。

→ 任された責任感や、実際に一台を手掛けることで得た喜びや苦労、試行錯誤を重ねた経験が、以降の製作における技能面でプラスの影響を与えていると考えられる。また「石水」という代々受け継がれている名前の重みをこれからも守り続けていかなければならないし、師匠や先代の名を傷つけないように精進していきたいという思いを強く感じているようで、心情面でもプラスの影響を与えていると考えられる。

⇒ 技能の進化につながる。

### ■ 「バッシングや指摘を受ける」

依頼された町内の人からの感謝の言葉とは裏腹に、町外の人からのバッシングを受けることがある。例えば、彫刻師によって、獅子などは空想上のもののため彫りの形は違う。鶴など実在するものを彫刻する時は、他の彫刻師と大差がないものでなければならない。彫刻で表現する際、折れてしまうことなどまで考えて製作すると、デフォルメ(対象を変形・歪曲して表現すること)をしなくてはならないが、それに対してこういうものじゃないと認めてもらえないことがある。

→ 肥えた目の人を黙らせる、認めてもらえることがやりがいに繋がっている。どれだけの人に満足してもらえるか、それを満たすために頑張っていきたい。どこまで満たせるかが、腕の見せ所だと思っている。

⇒ 技能の継承の度合いが高まる。

### ■ 「評価や周囲の人からの声を聞いた時」

完成したその場では分からなくても、後々祭礼で奉納され

る姿を見て喜んでくれている時や、引き渡した後も、町内の人と良好な付き合いを続けていけることで、共に年を取っていけることが有難いことである。西条はだんじりが一番で完成を楽しみにしているため、期限（お披露目）には絶対間に合わせる事が信頼関係を繋いでいくためには必要だと思っている。今まで一度も遅れたことがないのが、今一番自信をもって言えることである。

→ 作り手として、町内の人との関わりを持てるようになったことや、さらに他の町内の人との繋がりが持てることは幸せでありやりがいに繋がっている。祭礼中も携わっている町内の所に出向いて、一緒に担いで飲んでと関わることが楽しく、組み立てや解体の時にも呼んでくれる町内があることが嬉しい。そうした場合は、自分たちを知らない子供たちに知ってもらえる機会でもあり、西条祭りやだんじりを次の世代に伝えるきっかけとなるのではと感じている。

⇒ 技能の進化につながる。

上記に示したイベントを機に、技能の進化や継承の度合いが高まり、年齢を重ねるごとに、その技能進歩が深まってきたということが分かる。23歳で彫刻の仕事に就き、29歳で処女作である「北川だんじり」を手掛けた。この期間を経て、特に技能面や心情面の進化があったと考えられる。またそれ以降も、彫刻師としての経験を重ねながら、新たな自身のカタチを模索しているという点で、技能は進化していると考えられる。それを以下の図に表した（図7）。



(図7 年齢に伴う技能進歩の深さ)

以上より、周囲の人から評価をされることや、作品を完成させたことによって得た感情が、今後の技能進化に繋がっていると考えられる。指摘を受けたときや自身で満足できないときは、改善させて次に繋げる意欲が出る。人は通

常、指摘されることや満足できない時、気を落とすことがあるが、技能を進化させていくことにおいては、発奮させることが重要であると考えられる。また、周囲の人に喜ばれることや感謝されることで、自信に繋がり今後の彫刻に生きてくるだろう。これらのイベントが製作者によって異なり、これが可変的な部分である。この可変的な部分が、個性を持った技能進化に重大な影響を及ぼしていると考えられる。

## 10. 伝統継承の在り方

今回、ヒアリング調査としてお二方にお話を伺い、伝統文化の次世代への継承手法について分析した。

その結果、以下の事項が明らかとなった。

■ 伝統文化の継承内容について、代々受け継がれている「固定的な部分」と、技能の進化にあたる「可変的な部分」が存在している。

→ 時代の変化とともに、申し送りが続くと少しずつ伝統工芸の継承も変化している部分がある。歴史を追い、伝播の過程の中で、様々なプロセスを経て、形態も変わっていることがある。例えば、豪華で派手なだんじりが流行した時期もあれば、電車の電線の高さにより運行による制限がかかるようになるなど、様々な面から変化が起きている。その上で、地域に根付いた固有の伝統のものでも、固定的なものと同変的なものがあることが明らかとなった。

「固定的な部分」(技能継承)

- ・ 師匠の仕事を繰り返し作業していること
  - ・ 小さな仕事を繰り返すこと
  - ・ 指摘やアドバイスを定期的を受けていること
- 師匠の技が身についていき、次世代への伝承に繋がっている。

「可変的な部分」(技能進化)

- 技能面
  - ・ 師匠が仕事を受け、依頼者である地域の人のニーズを反映させながら、彫刻の下絵を描く。下絵から伝統や師匠の思いをくみ取り理解をした上で、作品として反映させる。
- 自身で解釈し、自分の表現力を駆使していく。その繰り返しのよって、彫刻師それぞれの個性が生まれてくる。

## ○心情面

- ・今は師匠の仕事を受けていることもあり実践できていないが、新たな彫り方を追求している。ゆくゆくは取り入れていき、自分だけのカタチを確立させていきたい。
- ・先代と同じ考え方もあるが、違う考え方もある。守るべきことは残して、凝り固まった考え方も代を引き継いでいく上で変えていきたいという思いもある。それを納得させるためには、自分の力をつけていかなければならない。
- ・製作にあたって、周囲からの指摘や評価、また自身が経験した出来事やその時感じた思いが、技能進化への意欲や活力に繋がっている。

■ 8割は自分で試行錯誤しながら経験していき、2割の部分は師匠や先代の「技能」や「心」を教わりながら、伝統文化である「だんじり」が次世代に代々継承されている。

→ 自分の中で試行錯誤を重ね、その都度師匠に見てもらい、技能や心を教わる。その後さらに自分の中で模索を繰り返し、また師匠からの指摘や指導を受ける。その繰り返しという伝承形態によって、先代や師匠の技が後継者へと伝わっている。

## 11. 結論

本研究では、西条祭りにおいて代々受け継がれている「だんじり」について、過去から現在にかけて、どのように継承されているのか、また今後の次世代への継承の在り方について調査を進めてきた。ヒアリング調査等を進め、分析していく中で、以下の事項が明らかとなった。

- ・西条だんじりの製作から完成までの流れを追うことで、西条祭りが地域の伝統的なイベントとして確立されていること。
- ・西条だんじりは、石水家では、地元西条市において、師匠から弟子へと継承されていく中で、後継者自身が伝統継承への責任と自覚を持ち、自身で模索を繰り返しながら力をつけていったこと。
- ・自身の人生の中での様々な出来事において得た責任感や周囲からの評価、信頼が、自信や製作の腕をより一層向上させたいという熱意に繋がり、個々人の個性を持った技能進化へと繋がる重要なきっかけとなっていること。
- ・伝統を継承していく上で、いかにして固定的な部分を自分

のモノにしていき、可変的な部分を自分のカタチとして表していくのが、後世に伝えるために重要であるということ。

## 12. 謝辞

本研究を卒業論文として形にすることが出来たのは、お忙しい時間を割いてヒアリング調査に協力していただき、貴重な生の声をお聞きすることができた石水公文さん、石水綱一さんのお二方のおかげです。そして、本研究を進めるにあたり、細かくご指導を頂いた馬淵泰先生に感謝申し上げます。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

## 13. 協力者・引用・参考文献

- 1 石水公文さん、石水綱一さん
- 2 改訂版 伊予西条だんじり祭り/村上俊行 著
- 3 「豪華絢爛西条祭り」：<http://www.saijomatsuri.jp/>  
(最終閲覧日：2019年1月4日)
- 4 「伊曾乃神社」：<http://www.isonojinja.or.jp/> (最終閲覧日：2018年12月16日)
- 5 「愛媛県生涯学習センター データベース『えひめの記憶』」：<http://www.i-manabi.jp/> (最終閲覧日 2019年1月10日)
- 6 「BLOG 西条祭り Views」  
<https://ameblo.jp/hiclutch245/entry-10681115573.html>
- 7 「技術・技能の伝承とコンセプトの伝承」山本泰三(2008)
- 8 「伝統的工芸品産業の技術継承における問題の所在」成田智恵子、下出祐太郎、来田宣幸(2016)
- 9 「運営形態からみた西条祭りの内発的発展の基礎的条件に関する研究」石川仁生、木下光、丸茂弘幸、長友伸介(2003)